

2017年9月6日

北九州市長 北橋健治 殿

一般社団法人 日本建築学会九州支部
支部長 菊地成朋



旧安川邸内「洋館棟」の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきまして御理解、御協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて最近、貴市戸畑区の旧安川邸の「洋館棟」が老朽化と利活用の困難さを理由に、撤去が検討されていることが新聞等を通じて報じられております。それに対し、旧安川邸利活用を図る第1回・2回懇話会では、委員8名中5名は「洋館棟」を保存すべきとの強い意見を述べたことを新聞等で伺っております。

旧安川邸並びにその「洋館棟」が有する貴重な価値については、本会会員日隈康喜・宮本雅明両君が貴市教育委員会の委託で作成した『安川家住宅調査報告書』（平成14年）から既に御承知いただいているところと拝察致します。

また安川敬一郎氏は改めて申し上げるまでもなく、筑豊御三家として明治鉱業の起業、八幡製鉄所の誘致や明治専門学校の開校など、近代工業都市・北九州の「生みの親」とも呼べる存在です。その敬一郎氏の晩年の住居が「洋館棟」に当たります。

たしかに、この「洋館棟」は一見、隣接する旧松本邸「洋館棟」（国重文）に比べると、地味で簡素な姿に映ります。しかし実はその造形は、アールデコ調と呼ばれる当時最先端のデザイン潮流を受け入れたもので、その様式史的な価値は近年とみに注目されているところです。さらに当時の上流階級の邸宅においては、「和」と「洋」という二つの規範をどう取り扱うかが大きな課題でしたが、この「洋館棟」には他の類例（例えば、飯塚市の伊東傳右衛門邸や唐津市の高取伊好邸など）には見られない新たな様相が窺え、その点でもこの「洋館棟」は、大正末期～昭和初期における日本の近代住宅史上の数少ない貴重な洋館遺構と高く評価することができます。

最後に、観光資源としての面に注目した場合、移築以前の「大座敷棟」の建設経緯が定かでない現状に鑑みれば、「洋館棟」は邸内で唯一、敬一郎氏による建設が史料から確實視できる点で、近代工業都市・北九州の確立期を示す記念碑的な遺構といえます。保存状態も良好です。市の世界遺産事業「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、炭鉱産業」構想に照らしても、八幡製鉄所の保安の問題等から見学対象施設が少ない現状の中、旧松本邸と一対で観光の目玉としての利活用が期待できる建物です。

以上、旧安川邸「洋館棟」の史的価値を改めて御理解いただき、貴重な文化遺産が末永く継承されますよう格別の御配慮を賜りたく御願ひ申し上げます次第です。なお、日本建築学会九州支部では、旧安川邸「洋館棟」の保存に関して学術的観点からの御相談を何時でも御受けする用意がございます。

敬具

2017年9月6日

北九州市議会議長 井上秀作 殿

一般社団法人 日本建築学会九州支部
支部長 菊地成朋



旧安川邸内「洋館棟」の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきまして御理解、御協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて最近、貴市戸畑区の旧安川邸の「洋館棟」が老朽化と利活用の困難さを理由に、撤去が検討されていることが新聞等を通じて報じられております。それに対し、旧安川邸利活用を図る第1回・2回懇話会では、委員8名中5名は「洋館棟」を保存すべきとの強い意見を述べたことを新聞等で伺っております。

旧安川邸並びにその「洋館棟」が有する貴重な価値については、本会会員日隈康喜・宮本雅明両君が貴市教育委員会の委託で作成した『安川家住宅調査報告書』（平成14年）から既に御承知いただいているところと拝察致します。

また安川敬一郎氏は改めて申し上げるまでもなく、筑豊御三家として明治鉱業の起業、八幡製鉄所の誘致や明治専門学校の開校など、近代工業都市・北九州の「生みの親」とも呼べる存在です。その敬一郎氏の晩年の住居が「洋館棟」に当たります。

たしかに、この「洋館棟」は一見、隣接する旧松本邸「洋館棟」（国重文）に比べると、地味で簡素な姿に映ります。しかし実はその造形は、アールデコ調と呼ばれる当時最先端のデザイン潮流を受け入れたもので、その様式史的な価値は近年とみに注目されているところです。さらに当時の上流階級の邸宅においては、「和」と「洋」という二つの規範をどう取り扱うかが大きな課題でしたが、この「洋館棟」には他の類例（例えば、飯塚市の伊東傳右衛門邸や唐津市の高取伊好邸など）には見られない新たな様相が窺え、その点でもこの「洋館棟」は、大正末期～昭和初期における日本の近代住宅史上の数少ない貴重な洋館遺構と高く評価することができます。

最後に、観光資源としての面に注目した場合、移築以前の「大座敷棟」の建設経緯が定かでない現状に鑑みれば、「洋館棟」は邸内で唯一、敬一郎氏による建設が史料から確實視できる点で、近代工業都市・北九州の確立期を示す記念碑的な遺構といえます。保存状態も良好です。市の世界遺産事業「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、炭鉱産業」構想に照らしても、八幡製鉄所の保安の問題等から見学対象施設が少ない現状の中、旧松本邸と一対で観光の目玉としての利活用が期待できる建物です。

以上、旧安川邸「洋館棟」の史的価値を改めて御理解いただき、貴重な文化遺産が末永く継承されますよう格別の御配慮を賜りたく御願ひ申し上げます次第です。なお、日本建築学会九州支部では、旧安川邸「洋館棟」の保存に関して学術的観点からの御相談を何時でも御受けする用意がございます。

敬具

旧安川邸内「洋館棟」の建物についての見解

一般社団法人 日本建築学会

九州支部建築歴史・意匠委員会 委員長 渡邊道治

■ 旧安川邸「洋館棟」の建設の経緯

旧安川「洋館棟」は、明治鋳業の起業、八幡製鉄所の誘致、明治専門学校の開校等を通じて工業都市・北九州の基盤を築いた安川財閥の創始者、安川敬一郎（嘉永 2 年 4 月 17 日<1849 年 5 月 9 日>-昭和 9 年<1934 年>11 月 30 日）が、晩年の居宅として建てたものである。次に、その建設の経緯をごく簡単に述べておく。

明治 45 年の上棟当初の安川邸は、日本家「本館棟」、日本家「玄関棟」、日本家「女中棟」、日本家「大座敷棟」（若松の旧宅より移築）、日本家「書斎・居間棟」、南蔵・北蔵等から成っていた。

大正 7 年、敬一郎は三男清三郎に家督を譲渡すると、同 15 年、日本家「大座敷棟」の東側の日本家「書斎・居間棟」を撤去し、その跡地に「大座敷棟」に正対させる配置で「洋館棟」を建設した。「洋館棟」は「工事竣工報告書」と棟札の存在から、起工日は大正 15 年 9 月 1 日、上棟日は同年 11 月 17 日、竣工日は昭和 2 年 6 月 30 日、施主は安川敬一郎、施工者は合資会社 清水組であったことが確認できる。竣工後は、敬一郎が死去する昭和 9 年 11 月まで、その居宅として使われた。

その後、清三郎が死去（昭和 11 年 2 月）し、清三郎の長男寛が安川邸を継承すると直ぐ、日本家「本館棟」が明治鋳業の社員倶楽部として移築された。そして、昭和 12 年 5 月、日本家「玄関棟」・日本家「女中棟」が撤去して日本家「本館棟」跡地と併せた場所に、木造二階建ての洋風「本館棟」と日本家「大座敷附属棟」を建設する工事が起工し、同 13 年 11 月に竣工した。その際、日本家「大座敷棟」と「洋館棟」は継承された。さらに昭和 43 年に正門脇に「現宅」が建てられ、同 51 年に洋風「本館棟」が玄関周りの部分を残して大部が撤去された後も、日本家「大座敷棟」と「洋館棟」は残され、現在に至る。

■ 旧炭鋳主邸宅に対する北九州周辺自治体の近年の動向

筑豊炭田を中心とする九州北部の炭田は、最盛期には国内の石炭の約半分を産出した。よって近代炭鋳主の邸宅は、近代史を語る上で有力な物質史料である。また、炭鋳主邸宅の広大な近代和風庭園と趣向を凝らした建物群は、文化財としての価値のほかにも観光資源としての魅力にも富む。これに注目して近年、北九州市近隣の自治体では、炭鋳主邸宅の保存と活用を進める動きが見受けられる。具体的には、飯塚市の伊藤傳右衛門邸・麻生大浦荘、築城町の蔵内邸、福岡市の貝島嘉蔵高宮邸、宮若市の貝島六太郎百合野邸、唐津市の高取伊好邸などである。

上記の周辺自治体の動向に鑑みた場合、旧松本邸と旧安川邸が隣接して存在し、しかも両邸が近代工業都市・北九州の基盤を築いた一門家の関係にある（敬一郎の二男健次郎は、松本家の養嗣子となった）という点で、まさに北九州市は絶好の文化・観光資源を保有しているといえる。但し、その資源価値を担保しているのは、以下に述べるとおり、旧安川邸の建物の内でも特に、「洋館棟」の存在に拠るところが大きい。

■「洋館棟」が示す主要な建築的特徴とその歴史的価値

この「洋館棟」が有する主要な建築的特徴として、次の4点を指摘することができる。

- ① 大正末-昭和最初期の最新式スタイルの「住宅」として、全国的にもごく稀少な現存事例であること。
- ② 「和」と「洋」の二つの文化の規範の下で展開した本邦の近代化の様相を語る好史料であること。
- ③ 後の大きな変化がなく、保存状態も室内・外観、構造材ともに良好であること。
- ④ 安川邸内の建物で唯一、敬一郎による建設が棟札・「工事竣工報告書」等の史料から確実視できること。

これらはやや専門的になるため、以下に解説を加えておく。

① 大正末-昭和最初期の最新式スタイルの「住宅」として、全国的にもごく稀少な現存事例である。

具体的にいうと、全国に洋館は数あるが、大正末-昭和最初期の最新式スタイルの「住宅建築」となると、現存例はごく僅かである。また、隣地の重要文化財 旧松本邸「洋館棟」の華麗で衆目を曳くハーフティンバー様式の姿に比べると、装飾性を抑えた旧安川邸「洋館棟」は一見、現代建築のデザインにも通じるところがあり、印象的には地味で簡素な姿にも映る。ゆえに旧安川邸「洋館棟」は、松本邸「洋館棟」に隣接しながらも、過小評価され、見過ごされてきた嫌いがある。しかしながら、この旧安川邸「洋館棟」の姿は、アールデコのデザイン潮流の影響を受けた、当時最先端のスタイルである。よって、現代的デザインとの偏差の具合を示準にした「無い物ねだり」的な感覚による単純な評価で文化財としての価値を計るのは的外れである。建設時の時代相に鑑みれば、旧安川邸「洋館棟」の建築史的価値は極めて高い。

また、「洋館棟」には3種類の平面図と2種類の見積書、設計図書が残っており、これらからは、設計過程での紆余曲折の様子が追える。一例を挙げると、アールデコ調の正面玄関側（東面）及び南面の外観が定まる過程で、「決定図」の朱書を持つ先行案図では、中庭が無く、1階外観の強い洋風色に対し、2階外観は和風色が目立つ。この上下階で「不整合」ともいえる案が、一時は見積を終えて決定する寸前の段階にあった。つまり、洋館の形態は単に技術・デザイン力の問題ではなく、時代相及びその規定を受けた施主の指向性で捉えるべき問題であることを再確認させてくれる好事例である。この建設に係る史料一式の存在が「洋館棟」の歴史的価値を更に高めている。

② 「和」と「洋」の二つの文化の規範の下で展開した本邦の近代化の様相を語る好史料である。

「洋館棟」は、正面玄関側（東面）と南面の外観にアールデコのデザイン潮流の影響を受けた当時最先端のスタイルを採用している。しかし、その一方で、北西側の1階の姿は全く対照的である。即ち、安川邸当主の公式の対面所である日本家「大座敷棟」を縮小複製したような形態の座敷空間（「御居間」8畳、「次ノ間」4畳、廻縁）を、「大座敷棟」に正対する格好で洋館本体に貫入している。そこでは少々、強引と思える操作が見受けられる。具体的にいうと、計12畳の座敷空間の内から4畳を割いて「次ノ間」を分化させ、伝統的な上座・下座の関係を仕立てている。つまり、室としての使い勝手よりも、座敷の格式性の創出を優先している。そして、「御居間」・「次ノ間」・廻縁の軒先にはアールデコ調の洋風外観との整合性・一体性を図るためか、洋風のパラペット陸屋根を廻らせているが、一方で、書院造りの標章である入母屋屋根の形を仕立てるためか、かなり緩勾配で扁平すぎるとも思える銅板葺き千鳥破風を取って付けたような格好で載せている。

また、「執事室」の脇には、正面玄関を経由せずに内枳形門（「洋館棟」建設時に、敷地の土塁壁に設けた「洋館棟」専用の門）から直に座敷（「御居間」）の床脇の廻縁に上がるための洋風仕様の脇玄関が設けられている。この脇玄関から廻縁に上がる敷居には、伝統的な杉戸が用いられている。これは、寝殿造り・初期書院造り邸における尊者・貴人が最短の距離で最上席に着座する、古典的な入邸動線を意識したものと

推察される。実際、計画案に終わったが、「洋館棟」建設時の外構と内柵形門（上記）の構想を描いた草案図には、脇玄関から北側へ伸びる中門廊のような突出部が描かれており、そこには「玄関」の文字表記がみえる。そして、正面玄関側の洋風外観と北西側1階の和風外観（「御居間」、「次ノ間」、廻縁）を視覚的に画する「目隠し壁」として、脇玄関の北側袖には、洋風部分の外壁と同じ仕上げ材を用いた高さ2.2m・幅0.7mほどの脇障子塀が、取って付けたような形で設けられている。この脇障子壁の存在は、当期における「和」と「洋」への目配せという問題が、一般にいわれる「和洋の融合」という方向だけで処理しきれぬものではなく、両要素を強引にでも「分離」「分割」する方向での処理手法をも常に必要としていた様子を物語っており、興味深い。

以上の特徴から、「洋館棟」には最新の「洋」への関心と共に、復古調の「和」への強い意識が窺える。そして、この「和」と「洋」という二つの規範に則ったリバーシブル状の外観と平面の構成は、“亜流の洋館”とも称すべき様態を呈している。ここには、洋風の最先端文化を求める一方で、和風文化の強い伝統的規範に拘束される姿。即ち、日清・日露戦争後の自国文化を再評価する思潮の下、「和風」と「洋風」の動向を両睨みし、俊敏に捉えることができる“新しいタイプのエリート像”の模索を迫られていた、当期の社会的最高層の苦心の様子が窺える。

そこで、安川邸の洋風「本館棟玄関」・日本家「大座敷棟」・「洋館棟」を、伊藤傳右衛門邸・高取伊好邸・貝島嘉蔵高宮邸・貝島六太郎百合野邸・麻生大浦邸・蔵内邸との関係で捉えるならば、安川邸は、大正末以降、洋館を主軸に据えながら「和風」要素を再編消化するコース（A型と仮称する）、伊藤・高取・貝島・麻生・蔵内邸は、和館を主軸に据えながら「洋風」要素を再編消化するコース（B型と仮称する）、と理解できる。一見、A型とB型は対照的な姿に映る。しかし、逃れ得ない「和」と「洋」の両文化への高度な目配せと葛藤の結晶という点では、理念の面で強く通底しているところがある。つまり、共通する理念が表層上は全く対照的な出力結果（A型とB型）を生み、一見したところ対照的に映るものの中に、むしろ強い親和性が存在した、ということである。この点は、旧日本陸軍の軍装の動きとも共通しており（第一次大戦後から満州事変頃の旧日本陸軍では、軍装にチェッコ式・ロス式軍帽、マント、ブーツ、タイトな軍服等、洋風をお洒落に着こなす「青年将校文化」が流行する。一方で、日露戦争後頃から満州事変頃にかけて、軍刀をサーベルから日本刀へ改め、名刀を指向する動きが加速する）、日本の近代化の特質を物語っているように思われる。

なお、B型の事例はA型に比べて稀少である。よって安川邸は、近代建築史上、大変貴重な事例であり、邸宅の類型を決定づける「洋館棟」の存在は、とりわけ重要である。

加えて、次代当主の日本家「大座敷棟」と敬一郎の「洋館棟」の1階座敷空間の形態も興味深い。

「洋館棟」の建設に伴って撤去された日本家「書斎・居間棟」には、回遊式大庭園に臨む「書斎」・「次ノ間」・廻縁が構成する一対の座敷空間がある。それを踏襲・再生産したものが、「洋館棟」1階の座敷空間（「御居間」・「次ノ間」・廻縁）と考えられる。そして「洋館棟」1階の座敷空間は、日本家「大座敷棟」を縮小複製したような平面構成を持ち、「大座敷棟」と正対する（上述）。さらに、「公的な接客儀礼の場」である回遊式大庭園の中核部を眺望できる場所に位置し、これを「大座敷棟」と分有する関係にある。一方、以前の日本家「書斎・居間棟」の座敷空間は、日本家「大座敷棟」とは正対しておらず、回遊式大庭園の中核部を眺望できない場所に配置されていた。ここでの「洋館棟」1階の座敷空間と日本家「大座敷棟」の関係は、江戸城本丸（将軍居所）と西ノ丸（大御所居所）の関係を彷彿させる。また、格式性・形式性の場である正殿（＝「御所」）と、内々の場・現実の執政の場としての「小御所」の関係をも彷彿させる。つまり、「洋館棟」は敬一郎の単なる隠居の場ではなく、一代で身代を興した財閥安川家の家政権の在処をめぐる創業者（敬一郎）と次代当主の微妙な均衡関係、即ち二頭体制を投影したものと評価できる。実際、聞き取りでは、敬一郎は「洋館棟」1階の座敷で親しい客と面談していたとのことである。

③ 後の大きな改変がなく、保存状態も室内・外観、構造材ともに良好である。

「洋館棟」の構造は、木造モルタル2階建。アールデコ調の洋館に和室を貫入・複合した形態を持つ。

洋室部分の外壁は、主柱の間に間柱・木摺・ラスモルタル下地を組み、色モルタル吹付仕上げを施す大壁式。和室部分の外壁は真壁式である。床下の構造は、1階はコンクリート布基礎、独立基礎、コンクリート製沓石・木床束を併用し、上部に土台・燧土台・大引・根太・力根太を組む。そして、床下全面に土間コンクリート打ちを施し、主玄関はモザイクタイル貼りとする。2階は、梁・大引・根太の上に、洋室では化粧板を直張り（1階「御洋間」は一部組木張り）、和室では床板・畳敷を施す。天井仕上げは、洋室は洋風格子縁に木摺下地漆喰塗り又は石膏ボード貼り、和室は竿縁天井である。小屋組みは、傾斜屋根の部分が和小屋組み。軒先の陸屋根の部分が、和小屋梁とボルト接合した水平の夾梁である。屋根の仕上げ材は、2階が天然スレート葺（雄勝産玄昌石カ）、1階が一文字銅板葺、パラペット及び堅樋が銅板製である。

設計寸法は、清水組作製の設計図と建物の実測値から、1間＝6尺の尺貫法であることが確認できる。2間単位での実測値との差は2～3mm程度で、施工精度は極めて高い。材寸は、主柱3.8寸角、間柱1.9×3.8寸（15寸間隔）、主梁4×12寸、土台・床束4寸角、大引4×8寸（36寸間隔）、根太1.9寸×4寸又は1.9寸（14寸間隔）で、相対的に太い。大壁式の壁体と相まって、堅固な造りである。

保存状態については、2階「新居間」の天井、2階「倉庫」前廊下の天井及びその直下1階の中庭北西隅柱周りの壁、1階東側「女中室」の天井で雨漏りがみられる。原因は、該当箇所直上の屋根材（棟の銅板笠木等）の損傷とパラペット・堅樋の詰まりが考えられる。しかし、比較的簡単な補修で対処できると思われる。また、20年近くも雨漏りが放置されてきたにも拘わらず、部材の損傷は驚くほど軽微で、雨漏り箇所の野地板と垂木数本、一部の壁の木摺の腐食に止まる。取り壊しの理由に雨漏りと老朽化が挙げられているが、実際は、構造材をはじめ床板・根太・垂木・野地板のレベルに至るまでかなり健全である。また、文化財指定を受けた他の建物の指定前の状態と比べても、かなり良好な保存状態にあるといえる。

④ 安川邸内の建物で唯一、敬一郎による建設が棟札・「工事竣工報告書」等の史料から確実視できる。

現在、旧安川邸では日本家「大座敷棟」の歴史的価値が特に注目され、利活用が検討されているが、実は、この建物については、若松の旧宅から移築する前の建設経緯が定かでない。若松の旧宅は明治22年から同36年までの間に建設されているが、この「大座敷棟」が敬一郎の建設によるものか、或いは他の屋敷からの移譲・転用等なのか、確証がない。この現状に鑑みれば、安川邸内で唯一、敬一郎による建設が棟札・「工事竣工報告書」等の史料から確認できるのは、「洋館棟」である。この点で「洋館棟」は、近代工業都市・北九州創立の記念碑的遺構とも呼べる存在である。

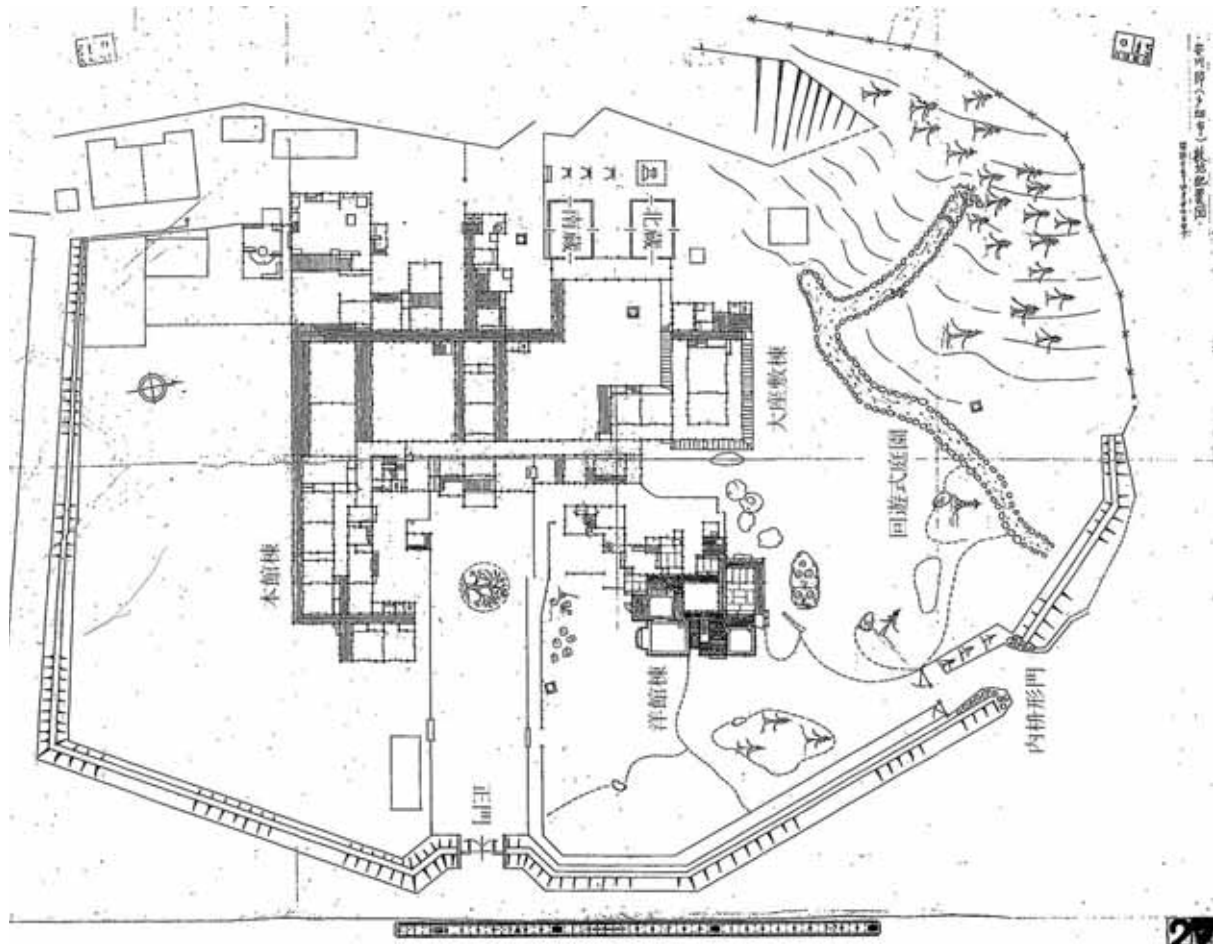


図1 「昭和10年4月27日写 安川邸(戸畑市)敷地配置図」(清水組建設所蔵)

※ 建物名を加筆。「本館棟」は、昭和12年起工の鉄筋コンクリート造の本館工事に伴い、撤去。現在は、玄関周りだけが「玄関棟」として残る。

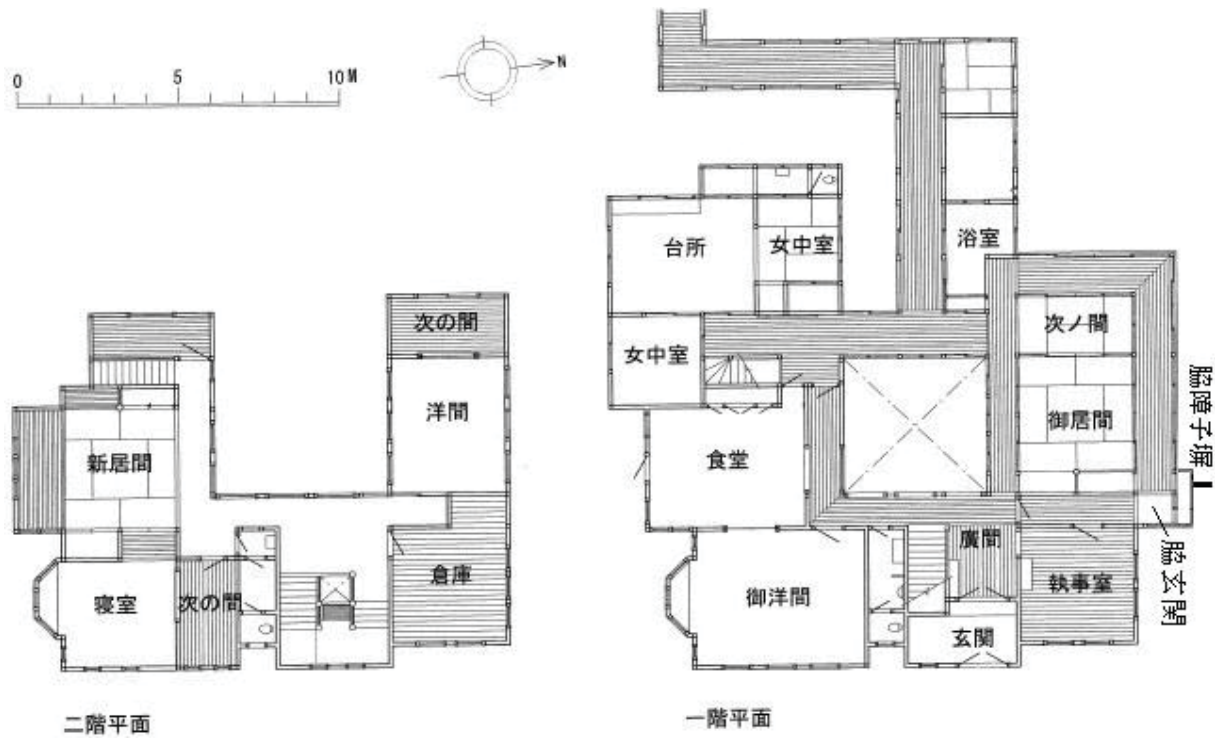


図2 安川邸「洋館棟」現状平面図

(日隈康喜『安川家住宅—北九州の近代化を支えた安川家の住宅史』2009年3月, 西日本新聞社, より転載・加筆)



写真1 正面玄関側（東面）と北面

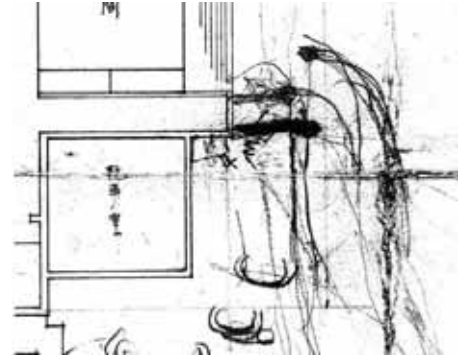


図3 「九州安川邸実測図」(安川家所蔵)

※起工前の草案図力



写真2 北西側 1階「御居間」「次ノ間」 2階「次ノ間」「洋間(書斎)」



写真3 南東側 1階「御洋間」 2階「寝室」



写真4 左:「洋館棟」 右:「座敷棟」



写真5 「次ノ間」の千鳥破風



写真6 階段室の造付け



写真7 西面 2階中庭



写真8 木摺・漆喰



写真9 小屋裏の架構と棟札



写真10 脇障子塀



写真11 中庭



写真12 天然スレート屋根



写真13 1階「御居間」と廻縁、脇玄関



写真14 1階「御洋間」



写真16 1階「食堂」



写真15
棟札(裏)